

第2学年 音楽科 学習指導案

山形市立第三中学校 三上 凜矩

1. 単元名 郷土に伝わる民謡のよさを考えよう（花笠音頭）

2. 単元の目標

- ・音楽の特徴とその背景となる文化や歴史との関わりについて理解する。 (知識・技能)
- ・音色、リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、生活や社会における音楽の意味や役割について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴く。 (思考力・判断力・表現力等)
- ・花笠音頭が生まれた背景や歌い方の特徴、声や楽器の音色、音階などに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組む。 (学びに向かう力・人間性等)

3. 単元について

(1) 教材観

『花笠音頭』は山形県を代表する夏祭りである花笠祭りで用いられている民謡である。花笠祭りは「ヤッショ、マカショ」という勇ましい掛け声や太鼓、笛など和楽器の音色とともに、あでやかな衣装を身に包んだ約1万人を超える踊り手が「紅花」をあしらった笠を持ち『花笠音頭』を舞い踊るのが祭りの特徴である。山形県山形市にある文翔館や市役所前の大通りで行われる。この祭りの始まりは昭和38年（1963年）まで遡り、蔵王の観光開発とPRを目的に「蔵王夏祭り」という名称であった。ここから姿形を変えながら、昭和40年から「山形花笠まつり」として単独で行う現在の形となった。

教材で扱う『花笠音頭』は、明治・大正時代、山形県村山地方で唄われていた「土突き唄」が元唄である。大正8年頃、尾花沢市郊外のかんがい用ため池工事の際に、土突き作業をする際に複数人で調子を合わせるための作業歌に「渡り土方」が歌う八木節や船方節などがミックスされ、新しく歌われた土突き歌が『花笠音頭』だとされている。

このような歴史から、『花笠音頭』は人の生活と密接に関わって生まれた音楽であることが分かる。ただお祭りのために生まれた音楽ではなく、地域をより住みやすくするための工事を複数人で協力して行い、その呼吸を合わせるために歌われていたのが元である。このことから、音楽と我々の生活の関わりについて深く学ぶことができる教材であると考えられる。

(2) 生徒観

本学級の生徒は、お互いに協力し合おうとする生徒が多い。委員会活動や係活動、声を掛け合って生活しようとする姿が多くある。また、学習に対する意欲が高く、授業におけるペア学習やグループ学習などを通して、友達と関わりながら学習を行う力が少しずつついてきた。多くの生徒が、関わりを持ち優しい言葉遣いで生活することができている。

山形三中の学区内で花笠祭りが行われる。そのため、本学級生徒の大半は花笠音頭を聴いたことがあり、小学校で踊りを踊った経験がある生徒もいる。また、お祭りで使われる音楽という印象から楽しいというイメージも強く、花笠音頭と生徒の距離感はかなり近いと言える。

しかし、花笠音頭の歌詞や由来、いつ生まれた音楽であるかを生徒に問うと、答えられない生徒がほとんどであった。このことから、『花笠音頭』はお祭りのバックミュージックという認識である可能性が高く、古くから根付いてきた文化的価値に気づいていないと考える。

(3) 指導観

5人×6グループに分かれ、タブレットを用いて花笠音頭の歴史を学ばせる。そこで、各々が得た学びを共有し、新たな疑問や知りたいことを出し、連携感をもちながら主体的・協働的に取り組む力を育てたい。また、市街地へ出向きインタビューもさせたいと考える。山形大学の花笠サークル「四面楚歌」の皆さんや、山形県花笠協議会など、インターネットだけではなく人と直接関わって学びを深めることで人とのつながりを意識させるとともに、『花笠音頭』の文化的・歴史的価値を引き継ごうとする人達の思いを感じ取れるようにする。

『花笠音頭』が生まれた歴史や背景、文化的背景と関わらせて学ぶことで、伝統文化への理解を深らせるとともに、郷土に伝わる音楽は元々お祭りのために生まれたものではないことに気づき、人々の生活と密接に関わっていることを実感させたい。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点 (見方・考え方)

相互性…花笠音頭を通して、自分たちが住む町の歴史や文化、人々とのつながりを学ぶ。また、花笠祭りを通して、これまで受け継いできた人々の思いを知る。

連携性…自分たちが住む町の代表的な祭りである花笠祭りに対して文化的・歴史的価値を見出し、これまで引き継いできた人たちのおかげで現在も行われている。自分たちの町で生まれた文化を自分たちで引き継ぎ、未来へつなげている。

・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

多面的、総合的に考える力

→『花笠祭り』を通して2つの視点で考える。1つ目は『花笠音頭』に対する文化的・歴史的価値について考えること。2つ目は『花笠音頭』(民謡)の音楽的なよさについて考えることである。

『花笠音頭』という一つの教材に対して2つの視点から考え、最後にはその2つの視点を総合して『花笠音頭』が引き継がれ、これからも受け継がれていくことについて気づくことができる。

つながりを尊重する態度

→この学習を通して、地域の人たちへのインタビューを行う。相手の話を聴く力や質問する力、自分事として理解する力を養い、文化は人・もの・ことにつながりで引き継がれていることを認識することができる。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正

自分たちが花笠祭りに愛着をもち、楽しく参加できているのは、『花笠音頭』に文化的・歴史的価値を見出し引き継ごうとして人たちの力のおかげである。そのため、自分たちも『花笠音頭』に文化的・歴史的価値を見出し、世代を超えて受け継ごうとする思いをもつ。

人権・文化の尊重

山形市民が『花笠音頭』を楽しむように、他の市や県、地方にも同じように文化があることに気づき、それらは過去の人たちによって引き継がれ、今を生きる人たちが引き継いでいるものである。自分たちが住む町の文化のよさに気づくとともに他の町の文化を理解し尊重しようとする。

・達成が期待される SDG s

17 みんなで街づくりをする。

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 学びに向かう力・人間性
<p>・花笠音頭の特徴や要素、文化や歴史、他の芸術との関わりについて理解している。</p> <p>・花笠音頭の曲想と音楽の構造との関わりについて理解している。</p>	<p>・花笠音頭のリズム、旋律、などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。</p>	<p>・花笠音頭の文化や歴史、生活との関わりについて関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。</p>

5. 単元の指導計画(全6時間)

時数	主な学習内容	学習への支援 (○)	評価・備考
1	花笠音頭について知っていることを挙げ、タブレットを用いて知識を深める。	<p>○花笠祭りをきっかけに、花笠音頭に対して可能な限りたくさん疑問が出るようにする。</p> <p>○教生徒から花笠祭りでの経験や踊ったことなどの経験を話してもらい、自分事としてとらえるきっかけづくりを心がける。</p> <p>○花笠音頭の元唄となった音源や土突き唄を聴かせるなど、音楽と触れる時間が少なくならないように留意する。</p>	ウ (主体的)
2	グループで、前時で出た疑問をまとめ、どのように解決するかを話し合い決める	<p>○前時で学んだ花笠音頭の歴史や文化から、全体で質問を集めてなぜ現在まで受け継がれてきたのかについて焦点を絞る。</p> <p>○人との関わりを持って『花笠音頭』の文化的・歴史的価値に気づくために、インタビューを積極的にするように声掛けをする。</p>	ア (知・技) イ (思・判・表)
3	町へ出て疑問の解決へ向けてインタビューをする。	○自分たちが調べた『花笠音頭』への知識をもとにインタビューを行うが、なぜ『花笠音頭』が今日まで引き継がれてきたのかという大きなテーマを意識させる。	イ (思・判・表) ウ (主体的)
4	インタビューで解決したことをまとめ、『花笠音頭』が引き継	○最初から討議をさせるのではなく、個人で考えをまとめてか	ア (知・技) イ (思・判・表)

	がれてきたことについてグループで討議する。	ら討議をさせる。 ○『花笠音頭』が引き継がれてきたことについて、正解はないことを事前に伝え、幅広い視野で考えを深められるよう留意する。	
5	前時で討議した内容を発表する。	○インタビューをしてわかったことや、『花笠音頭』が引き継がれてきた理由について、グループごとに発表する。 ○全体でまとめを行う。班の発表を踏まえて、可能な限り子どもたちの発表の言葉を用いながら、文化的・歴史的価値について理解を深める。	ウ（主体的）
6	『花笠音頭』や各地域の民謡の音楽的よさについて考える。	○音楽を構成する要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成）の視点を与え、考えをまとめられるようにする。 ○合唱コンクールや現代の曲など、比較鑑賞を行う。 ○『花笠音頭』の音楽的特徴を自分の言葉でまとめ、音楽的な面でどのようなところがよいと感じたかを文章にする。	ア（知・技） イ（思・判・表）